
インフィニット・テッカマン

シグマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・テッカマン

【Nコード】

N3284X

【作者名】

シグマ

【あらすじ】

それは、来るべき宇宙開発の時代への足がかりとして一人の科学者がのつたスペースシャトルが冥王星へと旅立った。しかし、冥王星がみえたという通信を最後にスペースシャトルとの連絡が途絶えた。それは、恐るべき侵略者との戦いの始まりのはずだった。しかし、その数年後ある機動兵器が登場したことで地球は混乱していく。以前上げた小説の改訂版です。設定なども以前とは変わっています。一番変わっているのは東さんです。東さんが常識人になっているので、それが気に入らない人はご注意ください。

第1話 長き戦いの序曲

それは、来るべき宇宙開発の時代への足がかりとして一人の科学者がのつたスペースシャトルが冥王星へと旅立った。しかし、冥王星がみえたという通信を最後にスペースシャトルとの連絡が途絶えた。反応自体が消滅したので、不慮の事故で死亡したと考えられた。科学者は有名であったが、これも運命であると世界中は悲しみ、彼の意思を継ぐためにも宇宙開発に熱を入れることになった。

「ん？ これは」

その科学者の友人でもあったある軍人の元に膨大な量のデータが送られてきた。そのデータは専門でもないその軍人が見ても分かるほどに「地球の技術をはるかに凌駕」していた。

2

「差出人は……奴だと!？」

データを送ってきたのは冥王星にて消息を絶ったあの科学者　　ヴ
イルヘルム。

『これが無事にお前の下へと届いていることを切に願う。地球は狙われている。信じられないかもしれないが、冥王星にて私は『ラダム』と呼ばれる生命体に襲われた。奴らは他の生命体に寄生する。私もすでに寄生されている。後どれだけ自我が持つのか分からない。』

だから、その前に私が集められるだけ集めたデータを君に送る。これを役立ててラダムから地球を守ってくれ。確か君は現在、アラスカの基地に居たよな？ 私が奪えただけの『テッククリスタル』を隕石に偽装して地球に送る。テッククリスタルに関してはデータで送っているとおриだ。これくらいしかできない私を許してくれ。そして、もし私が君たちの敵となったなら迷わず私を殺してくれ』

データの最後にはそう書かれていた。軍人　　ジヨシユアはこれがヴィルヘルムが差出人でなければ鼻で笑っていた。だが、彼がこのような嘘を付くとは思えない。データも地球では考えられない技術レベルだったから。

「……………私だ。ああ……………隕石は回収して私の部屋まで持ってきてくれ。ああ」

丁度、データを読み終わったとき基地の近くに隕石が落下してきたという連絡が入った。マクシミリアンはその隕石を回収するように告げると、ある場所へと連絡を入れた。

「もしかすれば…統一政府が必要なのかも知れないが……………無理か」

ジヨシユアはヴィルヘルムの言葉を信じていないわけではない。だが、宇宙生物が地球を狙っていると言われて誰が信じる？　ヴィルヘルムの事を知っている人間は信じるだろう。だが、大半の人間は信じないだろう。

「だが…この情報が事実ならば、襲来してからでは遅い」

ラダムは寄生するという。つまりは、気がつけば地球が支配されていてもおかしくはないのだ。ラダムがどのような形なのかは分からない。だが、寄生する生命体ということはどう考えても映画にあるような分かりやすい形ではないのだろう。

「……高原と斯波神、斑目に連絡を入れるか」

かつて、とある外人部隊で友情を育んだ三人を思い出し連絡を入れる。もしかしたら、協力してくれるかもしれないと思ったから。

「……ということだ。信じられないかもしれないが……ラダムに
対抗するために協力してくれないか？」

ジョシユアは、アラスカの基地に呼んだ旧友三人にヴィルヘルムが

ら齎されたデータを見せてそう告げた。

「……正直、俺は学がないからわからん。斯波神、どうなんだ？」

高原は一流のスパイではあるが、技術畑の人間ではないため判断が分からない。斑目も指揮官タイプなので同様。そのため科学者でもある斯波神に聞いてみた。

「ふむ…確かに、このデータなどの信憑性は高い。悪魔の証明になるが、地球外生命体の侵略が無いとは言い切れないからな。しかし、それを脇においてもヴィルヘルムが送ったデータは真実だ。この技術レベルの高さがそれを証明していると言っていい」

斯波神はラダムのことを真実と告げた。最早これは真実と考えなければ話が進まない。

「だが、幾ら何でも無理だな。実際に襲来してきたら動きやすいのだろうか…」

データにある技術を実現させるのは難しくはない。斯波神は世界でも有数の科学者。その妻も同じ。高原の妻も同様。時間はかかるが、実現させるのは可能。だが、ラダムに対抗するためには専用の組織なり、対抗するための地球統一政府などが必要だろう。だが、そのラダムが地球に襲来しているわけでもないのでそれらは無理。

「ふう。仕方ない…お前たち、私の部下になつてくれないか？ これでもアラスカ基地指令だ。ある程度自由にできるからな」

「まあ、この技術も実現してみたいしいだろう。なら、斑目。お前の組織を使えばどうだ？」

斯波神の提案に斑目は頷き、自分の組織でもある『市ヶ谷』を使うことに決めた。いずれ対ラダム組織が設立されれば、そのまま移行するようじ。

「なら俺は、いろいろ情報を集めよう。ジョシユア。お前は、俺達が進むように頼む」

「ああ。任せろ」

こうして、ある一人の科学者から齎された地球の危機への対抗策は徐々に形になっていくとしていた。

しかし、この数年後に世界が変わった。一人の科学者により「IS <インフィニット・ストラトス>」と呼ばれるパワードスーツが開発された。当初は見向きもされなかった。しかし、何者かのハッキングによりミサイルが一箇所に向かい発射され、その一部をたった1機のISが破壊したことで一気に世界は変わった。

「しかし…女しか扱えないなら欠陥兵器もいいところだぜ？ そこら辺どうなんだ、親父？」

隕石の中から見つかった『テッククリスタル』を所有する青年高原ハヤテはISのニュースを見ながら自身の父親に問いかける。

「まあ、パワーバランスは崩れるな。だが、チャンスでもある。お前もラダムの事は知っているだろう？」

「……つまり、ISのせいで職にあぶれた軍人をスカウトするってことか？」

未だ一流とは言えないが、優秀な息子を見ながら頷く。斑目の息子慎吾もすごいようだが、やはりそこは自分の息子を持ち上げたくなるのが親の心情。

「ああ。すでにマクシミリアンが友人たちに渡りを付けている。し

かも、あいつの友人はある意味優秀な人間ばかりだからな。ISが
もたらす『二次災害』も理解している」

そして、高原はハヤテを連れて再び世界を飛び回る。その途中で、
『市ヶ谷』と協力体制を取っている暗部組織『更識』に立ち寄り、
ハヤテに経験を積ませるといふ名目で置いていった。どうも『更識』
との繋がりを強めるためらしい。

「お兄様。御本読んでください」

「はいはい。そして、簪ちゃんは拗ねないの。慎吾もすぐに返って
くるから」

ぶつちやけ、ハヤテは楽しんでた。次期『楯無』と称される少女
と一緒にのほほんと暮らしていた。無論、テツカマンとしての鍛錬
も怠っていないかったが、今までアマゾンやエリア88といった正直
生命がいくつあっても足りないような場所にいるよりよっぽどまし
だった。そして、今は幼い姉妹を相手につかの間の休息を味わって
いた。

「慎吾の奴…今どうしているのかねえ」

確か、人手が足りないためイギリスの軍へと交渉に出向いている親
友の顔を思い浮かべながら姉のほうを膝に抱いて本を読み始めた。

「……『エマニエル夫人』って……これ子どもが読んでも大丈夫か？」

妹の方は普通に慎吾が買ってきたであろう絵本を見ているのに。

「あゝ私は交渉に来たのですが？」

「ああ。それは承知しているんだよ。ただ……オルコット家というのはいささか特殊だね？」

イギリスにいた慎吾は頭を下げてくる交渉相手に啞然としながら手元の資料を見る。どこから情報を仕入れたかは知らないが自分の父親が日本の諜報機関の隊長と知ったオルコット家の当主の女性が自

分たちにつくように言ってきたのだ。

「女尊男卑の思想がここまで早く広がるとは思いませんでした」

慎吾は様々な機関にハッキングをしかけていた。その結果すでにISのスペックなどに気づいた者たちが手動となって女尊男卑の思想が広がっている。恐らく、このオルコット家の当主というのも自分は力を持っている。故に従えというのだろう。まあ、そう言うのは嫌いではない。むしろ、慎吾からすれば好意を抱く。だが、だからと言ってその誘いに頷くほど仲間に絶望していない。

「まあいいです。はつきりと私の口から断っておきます。そもそも、こちらとしてはこの人たちに従う義理は無い。どうです？ 貴方も『TLT』に参加しませんか？」

すでに、太平洋上に人工島を築き形になりはじめている対ラダム特務機関。ISのおかげで人材もある程度確保できる目処が立った。

「貴方も軍人であるならばこれからの世界に納得しますか？ 男だからといって、ただそれだけの理由で戦場から排除される世界に

」

慎吾はハヤテと同じくまだ若い。しかし、自身の父親により鍛えられたハッキングや交渉術はそれなりの物であると自負している。こ

うして、徐々に仲間を増やしていった。

そして、この数カ月後にとつとつラダムが地球に襲来した。

第1話 長き戦いの序曲（後書き）

以前、投稿した「IS×テックカマンブレード」の再掲・改訂版です。といっても、現実が忙しいので亀更新です。まあ、暇つぶし代わりにどうぞ。

第2話 ISの登場(前書き)

時系列が少し変です。

第2話 ISの登場

「りよーへーりよーへー！ 聞いてよ！ ちーちゃんがね」

「どつでもいいが…後ろにそのちーちゃんがいるぞ？」

「え？ あばばばばば」

「お前はー！」

これはある中学校での一幕。ぼさぼさの黒髪の少年の傍には何故かうさみを付けている少女と黒髪の凜とした雰囲気少女がいる。彼らはいわゆる幼馴染みという関係。

「びええええええ！ りよーへー！」

「………待て。何があつた？」

滝のように涙を流しながらウサ耳少女篠ノ之束に抱きつかれた佐野遼平はその頭を撫でながら話を聞いてみた。もっとも、もう一人の

少女織斑千冬は不満げだったが。

「なるほど。束が作った設計図はバカげていると……まあ、確かに
そう言いたくはなるだろうが……」

束が書いた設計図それは『インフィニット・ストラトス』と名付け
られた宇宙作業用のマルチフォームスーツ。確かに、荒唐無稽・ア
ニメに出てきそうな理論。だが。

「俺も一応は技術者を目指しているからな。一概に否定はできん。
これがあればいろいろな部分に応用できそうだ」

「でしょでしょ！ りよーへーならそう言ってくれと思っていた
よー」

「……」

千冬は目の前の二人を睨んでいた。東と遼平は共に理系というか将来工学系の大学に行きたいらしい。一方の千冬はどちらかと言えば体を動かすことが得意。つまり、この二人がそんな話をしていると話に入っていけないため寂しいらしい。

「それでね？ これを完成させて……りょーへーとちーちゃんとはーちゃんといつくんとで宇宙に行きたいんだ！」

「ふむ……いいな。宇宙には無限の可能性がある……行きたいな」

「……お前ら私を無視するなー！」

遼平と東が何かに熱中すればハブられた千冬が拗ねる。これがこの三人の日常。その周りには美少女二人を独占している遼平に対する嫉妬に燃える男たちがいる。

「死ねや佐野オ！」

「……東」

「はいはーい。東さん特性のスチール棒だよ」

槍術部の部長である遼平の為に作った束特性のスティール棒。それを狭い教室の中で自在に扱い、嫉妬に燃える男たちを次々と沈めていく。

「篠ノ之さん！ 私たちは佐野くんが勝つに1000円ね！」

「それじゃ賭けにならないよ？ あ、でも男子は殆どりょーへーが負けるに賭けているから大丈夫か」

「いや…お前ら」

普通に「佐野VS嫉妬仮面」で賭けをしているクラスメイトたちとその胴元になっている束をなんとも言えない気持ちで見っていた千冬。そして、教室の扉が開きそこから担任である風原教諭が現れたので彼に何とかしてもらおうと思ったのだが。

「篠ノ之」。佐野勝利に1万」

「オツケー」

「先生！？」

頼みの綱の教師もそれに参加していたからもう千冬は考えるのをやめた。

「りょーへー。進路希望調査ってもう出したの？」

「ああ…って、お前らはまだか」

「うん。私もちーちゃんも特に考えていないんだ」

「それで、お前の進路を見て参考にしようと思ってな」

二人にそう言われて遼平は自身の進路希望調査の紙を取り出した。そこには高校名ではなくある研究施設の名前が書かれていた。

「『フェルミオン粒子研究所』って…りょーへーはここに行きたい

の？」

「フェルミオン粒子研究所は一般的にはあまり知られてはいませんが、次世代エネルギー研究所から最近になって独立した研究所。東も名前くらいは聞いている。」

「ああ。その斯波神所長の論文を見て、な」

「数力月前に発見された新粒子『フェルミオン粒子』とその研究の第一人者である斯波神博士。遼平は彼の論文を見て『フェルミオン粒子』に興味を持ち、斯波神博士に手紙を書いた。すると、もしよければ研究所に来ないか？と誘われたのだ。斯波神博士はその研究所の所長で遼平に興味を持ったらしい。」

「うーん。東さんも気になるなあ……でも、ちーちゃんと離れるのもいや。というか、りょーへーとも離れるのもいや」

「確かにな。小学校からの付き合いだし……今更別れるのも」

東と千冬はそう言って肩を落とす。遼平は呆れながらも仕方ないと思う。この二人は今でこそクラスメイトとも打ち解けているが、最初の頃は排他的だった。両親がおらず、幼い弟の世話でいっぱい。千冬と、他人よりも優れた頭脳を持っているから実の両親にも時折恐ろしい物を見る目で見られて孤独になった東。この二人

は当初社会的とは言いがたかった。それが、ここまで改善された。その裏では。遼平が色々世話した結果である。それが原因なのかは分からないが、三人で一組という感じになった。それこそ『どんなときも』である。

「別れるも何も、俺は千冬の家にいるんだ。高校が違ってモ夕方以降は会えるだろうが」

遼平にも両親はいない。覚えているのは、殴られていた毎日が突然終わり、冬の寒いこの街に放り出されたこと。その時に、とある老人に引き取られたのだがその老人も自分が小学校三年になったときに死んだ。紆余曲折はあったが、老人の遺品などを整理した後友人となっていた千冬に自分の家に住まないかと誘われて現在に至る。

「それはそうだけどさ。あ、でも私がこのISを創り上げる。そして、りよーへーは『フェルミオン粒子』を研究して、ISに応用。そこで、それをちーちゃんが着用！ これはいい！」

「……千冬。止めなくていいのか？」

「……もうこうなると止めようがないだろう」

それに、落ち込んでいた束が立ち直ったならそれでいい。身内には甘い千冬であった。そのようなことがあったのだが、数ヶ月後束に

呼び出された遼平と千冬。指定された場所は寂れた工場跡だった。

「……千冬。束はいたか？」

「いや……いない」

不良グループのたまり場という噂がある場所に赴くに当たり、遼平は束特性の鉄の棒を持ってきたのだが、不良の一人も見当たらない。ちなみに、千冬は何も持っていない。竹刀を持ち歩くのは無理だった。遼平は偽装用としてホームセンターのロゴが入ったテープを鉄の棒に貼っている。

「遼平。こっちに来てくれ。何か文字がある」

「……『この扉を開くのだあゝ！』だと？」

千冬が見つけた工場入口に貼られている紙。そこには束の文字でそのような事が書かれていた。鉄棒を千冬に手渡した遼平が警戒しつつ扉を開けるとそこには束と『白』がいた。

「フッフッフ。よおく来たね！　これが東さんの作ったISだあ！」

「……なに？」

東は中学生にしては発達している胸を強調するかのように腕を組み、高らかに宣言した。これこそが自分が作り上げた『皆で宇宙に行くための手段』だと。これこそが『インフィニット・ストラトス』だと。

「これが？」

「うん。女性にしか扱えないけどね。でも、調整を続ければ宇宙に行ける！　ほら、宇宙飛行士は男性が多いけど、これなら女の人でも宇宙を自由に目指せるよ」

「確かにな」

宇宙飛行士は基本的に男性しかいない。女性もいないわけではないが、色々な事情などからその数は少ない。しかし、このISを使えば女性でも宇宙に行ける。

「ちーちゃんにはこれのパイロットを、りょーへーには私と一緒に調整を頼みたいんだ。お願い！ 皆で宇宙に行きたいんだ！」

そう言っつて頭を下げる束。遼平と千冬は顔を見合わせると互いに苦笑して束の手をとった。

「やってやるつ。私たちならできるさ」

「ま、宇宙には行きたかつたしな」

「あ、ありがとう！」

学会に発表しても一笑に付された。それでも、束は遼平と千冬と三人でISの能力を説き続けた。遼平がフェルミオン粒子研究所に入ってからのは拠点をそこに移し、束と千冬も研究所所員としてISを調整し続けた。

「うん。実に面白いものだ。資金は気にしなくていいよ」

所長の斯波神博士は束が見せたISを見てそう言っつてくれた。束は初めて『身内以外に』認められたことでより一層IS研究に熱が入った。他の研究所の所員は良くも悪くも悪くも科学者・技術者が多かった。

そのため、ISに対して「素晴らしい。俺のロマンが蘇ったア！」
や「負けられるか！俺が作るパワードスーツのほうが優れている
って証明してやるよ！」などと好意的である。

「まだまだ！ 東さんは諦めないよお！ 東さんの技術はあ…研究
所—イイイイ！」

「……千冬。アイツ、徹夜何日目だ？」

「多分……4日目。そろそろ、強制的に眠らせるつもり」

そのような環境で東はこれ以上無いほどテンションがハイになって
いた。たまに、千冬の弟の一夏と東の妹の篝が遊びに来るのだが、
その時にテンションが振り切れている東を見て二人は泣いた。そり
やもう滝のように。遼平と千冬が慰めたが、恐らくあの東の高笑い
でフラッシュバックはするだろう。

「フッフッフ…ん？ しょちよー。どうしたの？」

『東君。ISには確か…武装も付いていたな？』

突然、東に斯波神から連絡が入った。なんでも、米軍の軍基地が何
者かのハッキングを受けてミサイルが日本に発射されたらしい。な

ので、ISを使ってそれを破壊してくれないかということ。ISは『絶対防御』を代表する技術がある。万に一つも搭乗者が危険に陥るといふ事はないだろう。

『それに、アメリカにいる知り合いもミサイル撃墜用の部隊を差し向けては』

「オツケイ！ 東さんとちーちゃん、りょーへーに任せて！」

すでに、遼平はIS『白騎士』の調整を初めている。千冬は状況が飲み込めていないが自分が何かをするのだと気づき息を呑んでいる。

「ちーちゃん……私を信じて。ちーちゃんはただ飛んでくる鉄の筒を斬ればいいだけ」

「安心しろ。東と俺が調整したものだ。お前なら……100%の力を引き出せる」

東と遼平がISというものを認めさせるために死ぬ気で頑張ってきたことは千冬も知っている。特に遼平は元々フェルミオン粒子の研究のためにここに来たのに、今はISとフェルミオン粒子の研究を並行させている。そんな二人を見ていた千冬は寂しかった。千冬は二人にお茶を淹れるか、ISのテストパイロットをするだけだった。でも、今は違う。あの二人の期待を背負っている。

「や、やってやる。私が……ISを……認めさせる！」

両手で頬を叩くとISに乗り込んだ。幸いにもこれからテストを行うつもりだったので専用のスーツには着替えている。

「うん！ 帰ってきたら研究所を上げてパーティだよ！」

「フラグを建てるな。行って来い。お前ならやれる」

「ああ。織斑千冬と『白騎士』出るぞ！」

研究所の天井をぶち破って飛び出した白騎士。その大穴を眺めながら東と遼平は千冬の無事を祈った。この天井の修理費から目を逸らしながら。

日本に迫っていたミサイルは米軍と日本の空自の戦闘機により半分は撃ち落せた。しかし、その残り半分を『斬り落とした』のは白騎士。これによりISは一気に世界の注目を浴びた。束はこれで『ISを使って皆で宇宙に行く』という夢へ近づいたと思った。しかし、束の願いとは真逆の方向へと世界は変る。

第2話 ISの登場（後書き）

東さんは人見知りだけど常識人です。ISを作った理由も「皆で宇宙に行きたいんだ」という理由です。ハッキングはしていませんよ？

とりあえず、次回お会いしましょう。

第3話 現れた敵

「違う！ 私は…私はこんな世界望んでいない！ なんで……なん
でえ！？」

束は泣いている。千冬は束を抱きしめている。一夏と篤はどうすればいいか分からずにただオロオロとしているだけ。遼平はこの場にはいない。ISがお披露目された直後から斯波神所長と共にアメリカに向かっている。他の所員は現在、研究所に来ているIS関連の電話や来客の対応でんやわんやしている。

日本に向かっていたミサイルの半数を撃墜したISは瞬く間に世界中に知れ渡った。束は喜んでISのデータを公開した。そして、これを宇宙へ行きたいと願う女性のために使ってくれと願った。しかし、それは裏切られた。ミサイルを撃墜したISに目をつけた者たちが居た。その者たちのために世界は束が望んだものではなくなつた。

『ISを使えるのは女性だけ。ならば、女性は優遇されるべき』

そう唱えた運動家がいた。その運動家たちのせいで世界は急激に『女尊男卑』の世界へと変わった。そして、ISは本来の目的とは全く違う方向に使われていた。

『ISの武力を見過ぎすのはもったいない』

束が予め製作して、国連に提出したISコア467機は国連加盟国に『不平等』に分配され、それぞれの国で軍事力として扱われた。束は絶望した。自分はちゃんと宣言した。ISは宇宙を目指す人に使って欲しいと願った。しかし、それがどうだ？ 確かに、ISの技術を応用したことで実現不可とまで言われたものが完成した。しかし、宇宙を目指す人のためには使われなかった。それはまだ許せる。世界全体の技術レベルが上がればいずれは宇宙を目指す人が出てくる。でも、女尊男卑など認められない。

『篠ノ之博士は虐げられている女性のために立ち上がったのだ。ならば、私たちはその意思を汲みとっていかなければならない』

アメリカかどつかの女性運動家がそう言った。誰がそんなことを言った？ 私は宇宙を目指す女性のためにISを作った。ISを使えば、女性でも簡単に宇宙を目指す。ISの技術を応用すれば、男性だって簡単に宇宙を目指す。そう思っていた。なのに。

「私は……私はあ……ただ、皆で宇宙に行きたかっただけなのに……こんな世界望んでいないのに！ やだ……もうやだア！ ISなんて作らない！ こんな世界嫌いだ！」

束は千冬の服を握り締めながら泣き叫んだ。束は天才だ。しかし、千冬や遼平と同じく15になったばかりの少女だ。そんな少女が願った夢は『人間』という存在に歪められた。軍事転用は覚悟していた。だが、世界思想を変えることなど分からなかった。

「今戻った」

「遼平……その……」

久しぶりにあった幼馴染みは白衣を身に纏っていた。空港から急いできたのか息は上がっているが、そこにいるだけで千冬は安心できた。

「騒ぎは聞いた。すまん。色々と準備をしていたので遅くなった。それより、束。国連がお前の身柄をほしがっている」

「ヤダ！ あいつらなんて知らない！」

隠れるように千冬に抱きつく束。しかし、遼平はそんな束の頭を撫でるとある言葉を紡いだ。

「なら…俺と来ないか？ 千冬も、一夏も、篝も、T.L.Tに来ないか？」

「TLT?」

束は顔を上げて遼平を見た。束の目に映った遼平はとても頼もしかった。

「詳しい話は別の場所で話す。とにかく着いてこい」

遼平は束を横抱きに抱えると、千冬たちをつれて研究所の裏庭へと連れてきた。そこには青色の飛行機があった。

「ISの重力低減システムを応用した試作型航空機『ブルーアース』だ」

「佐野オ！ 玄関が破られた！ 早く行け！」

「すみません。後は任せます！」

先に乗せた束と千冬に一夏と箒を抱え上げて渡しているときに研究所の仲間が飛び込んできた。どうやら、強硬手段に出たらしい。すぐさまブルーアースに飛び乗るとエンジンを起動させ一気に飛び立った。

「今から向かうのは、太平洋上に建造された人工島だ」

あつという間に海上に出たブルーアースは、一直線に太平洋上を指す。一夏と篤はキャツキャとはしゃいでいるが、束と千冬は状況が飲み込めていない。

「TLTは正式には『Territorial Liberation Trust』の略だ。まあ、なんで解放などと言っているかというと、そこは色々と込み入った事情がある」

ブルーアースを操縦しながら遼平はこの数ヶ月のことを話す。何でも、斯波神所長の友人たちと会っており、その人達から『色々』と鍛えられていたらしい。大事なときに傍にいてやれなくてすまなかつたと謝られたが、こうして自分たちを守るだけの後ろ盾を見つけているならいいのでは？と千冬たちは思った。そして、一夏が声を上げた。

「あ！ 島だ！」

「あれがTLTの本拠地。人工島『フォートレスダム』だ」

それはどれくらいの大かさだろう？ だが、確実に先ほど眼下に見

えた伊豆大島くらいの大きさはある巨大な島。これが人工島？

「まあ、元々は小さな無人島を増改築した結果だな。実際は海底にも広がっているから佐渡ヶ島くらいはあるんじゃないか？」

千冬たちがその大きさに唖然としてしているとブルーアースはフォートレスフリーダムの発着場へと降り立った。

「さて降りるぞ」

遼平に促されるままにブルーアースを降りるとそこには結構な人が居た。中には一夏たちとそう年が変わらない者も居た。

「ほほう？ 彼女たちが？」

「ええ。とりあえず、場所を変えましょうか。ハヤテ、慎吾はちびっ子たちを頼む」

「うーっす」

「分かりました」

中学生くらいの少年二人が一夏たちに挨拶している横で、遼平は束と千冬を連れて会議室らしき場所へと入っていった。

「あれ？ 姉さんたちは？」

箒が束たちを探して周りを見渡すが、すでにここにはいない。すると、二人を肩車して歩き出した。

「とりあえず、遊ぼうぜ。ゲームも色々あるから…何やりたい？ あ、ちなみにお姉さんたちは少し難しい話をしているぜい」

「へー。あ、スマ ラある？」

「あるぞ〜？ よし、俺のガノンちゃんが無双したる」

「俺と箒のリンクとロイに勝てるわけないって！」

「あんだと〜？」

「（相変わらず子供と打ち解けるのは速い……あ、思考回路が似ているからか）」

親友のハヤテに対して結構失礼な評価を下している慎吾。

「ラダム？ え？ そんなSFが実際に？」

「まあ、そう言われても仕方ないね。私たちも実際に見るまでは信じられなかったからね」

会議室ではTLTの説明などが行われていた。TLTは今では亡きヴィルヘルム博士の齎した情報を元に宇宙生物ラダムの侵略から地球を護るために設立され、フェルミオン粒子研究所もそのために作られた機関で、現在はTLTの研究機関となっているらしい。

「とにかく現物を見てもらったほうがいい。高原、頼む」

TLTの最高司令官である元米軍中将のジョシユア・ヴァーミリオンはそう言って友人でTLT創設メンバーの一人高原にあるものを

持ってこさせる。

「これは……これがラダム？」

「そつだ。ラダムは寄生生命体。他生物に寄生し、操ること増殖・侵略を行う」

そこには小さな虫のような生物の死骸があった。

「篠ノ之君。君のISが世に出るきっかけとなったミサイルハッキング事件だが、担当者がこのラダムに寄生されていた。さらに、君が毛嫌いしている運動家を扇動したのもラダムに寄生されたものだと分かった。」

「……こいつが……」

束にとってラダムがあ的事件を仕組んだとしたらそれは憎むべき存在。だが、束は一つだけ疑問に思う。

「なんでこんなことを？」

「推測でしかないが…ラダムは生命体ならば何にでも寄生する。つ

まりはどれだけの規模なのかが分からない。そこで、ISを台頭させ戦闘機や戦車などを縮小させれば」

「戦いは数、ということだ。それに、ISがいくら強くとも今だに戦闘ノウハウはない。実際に戦闘になれば士気・連携の面で既存の兵器より劣る」

戦いは数。一騎当千と呼ばれようと万の数を当てられれば負ける。つまりは、そういう事。かつての大戦でも高い技術力を持っていた日本軍やドイツ軍が敗北したのは補給や兵器数でアメリカなどに劣っていたから。

「ラダムに寄生されたのならば、ラダム寄りに思考が働くのは当然。つまり、今回の件はラダムに仕組みられた結果とも言える」

遼平の言葉に束は怒りをたぎらせていた。ラダムのせいどころになったのはもはや必然。束にとってはラダムは憎むべき存在となった。

「その…寄生されていた人は？」

千冬は束を抑えながら聞いてみた。ラダムに寄生された人は無事なのか。しかし、返ってきたのは望んでいたものではなかった。

「残念だが、ラダムに寄生された生物は助からない。ラダムに寄生された時点でラダムと一蓮托生の身。体から寄生したラダムを引き剥がしても宿主は死ぬ」

つまりはラダムに寄生された瞬間に死ぬか、ラダムに操られる道しかない。

「篠ノ之束君、織斑千冬君。君たちの力をT.L.Tに貸して欲しい。勿論、君たちとご家族の身の安全は保証するし、君たちの夢を叶える手伝いもしよう」

聞けばT.L.Tの装備はまだ十分と言えない。一応は、フランスのデユノア社とアメリカのF.Fカンパニーをスポンサーとしているが、やはり色々足りない。名前を出した二社はIS技術を取り入れたらしいが、やはりまだノウハウもない状態。先日、やっとPICを応用した重力低減システムを航空機に搭載したばかり。しかも、それすら安定しない試作機。だから、各国が束を確保しようとしていたときに遼平経由で接触できたのは幸運とも言える。

「私たちは『女尊男卑』には興味はない。ラダムから地球を護る事を目的としている」

急速に広がった『女尊男卑』の思想。そのせいで、各国軍人も解雇されたりするものが増えてきた。T.L.Tは人員が少ないこともあり、それらの軍人を雇用したりして人員は増えた。女性職員もいるため

男女比率が「6：4」ではあるが、行動が早かったため女性に対して過度な敵意を持つ者は少なかった。

「対抗手段がないわけではない。だが、それも数が少ない上に適合者選抜がIS以上に厳しいのでね」

ジヨシユアの言葉と共に遼平が懐から宝石に似た何かを取り出した。

「佐野くん。やってくれ。だが、決して無茶はしないように」

「了解。テックセッター」

取り出した宝石を右手に持った遼平が何かを呟くとその体は光に包まれた。あまりの眩しさに二人は目を瞑ってしまった。光が収まったので目を開けるとそこに遼平の姿はなく代わりに鎧をまとった騎士のような人が居た。

「これこそがTLET最大の戦力。ラダムに対抗するためにもたらされた存在。テツカマン。佐野くんが変身するのはテツカマンランス。現時点でTLET唯一の戦力だ」

「テツカマン……」

束はただでさえ混乱していたところにラダムという侵略者、テッカマンという存在。そして幼馴染みそのテッカマンという事実。フリーズしていた。そして、それは千冬も同じ。でも、一つだけわかるのは束は自分の夢がもしかしたら再び叶えられそうだったということ。

「……………なん……………だと？」

「あら。ハヤテのガノンと私のサムスのコンビが負けるとは……………」

「フッフッフ。どうだ！」「」

ちなみに、ちびっ子二人はハヤテたちと楽しく遊んでいた。

第3話 現れた敵（後書き）

この小説では束は普通？の女性です。

ISコアを作成しないのは、世界に絶望したから……どこかで見たような設定だな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3284x/>

インフィニット・テッカマン

2011年11月19日17時52分発行